

# 京鹿子

昭和二十三年九月一日第三種郵便物認可  
平成二十一年七月一日発行  
通巻一〇一九号 毎月一日発行



7月号

夏期吟旅特集号

— 近 詠 —

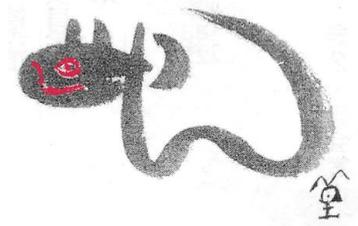
# 三十六峰 丸山佳子

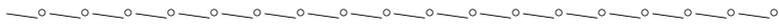
シグナルの青や赤にも春惜しみ

寺宝展に更衣して瓜切つて

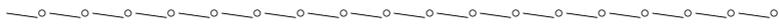
心いつも同じにあらず青き踏む

師に師あり松の芯には庭師あり





土筆ふむ三十六峰の端に来て  
初蝉や誰をお待ちかパイプ椅子  
峠ハツピーー只今五本上り藤  
八十八夜鳥は木や水汚さずに  
オハヨーとにつこりして言ふ朝顔に  
本当の心聞けない蝉しぐれ

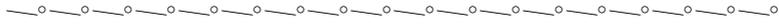


豊 田 都 峰

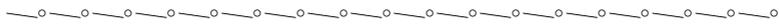
清 響 集 その九十九

若 葉 風 つ れ て 越 え ゆ く 分 水 嶺  
山 藤 か け 国 境 な る 村 数 戸  
源 流 や し や く な げ し づ く 加 へ つ つ  
春 川 を 発 た す 思 古 淵 大 明 神  
荒 行 の 生 み し 聖 や 寺 若 葉  
金 泥 も て 描 か ん 父 郷 の 竹 の 秋





目借時ちよつと遠出のかなふかも  
磯巾着波に託せるものもなく  
磯巾着たゆたひにのることもなし  
開帳の磴十段の祈りなる  
開帳や闇に刻みし襷ふかく  
首蓆座せし高さの遠嶺なる  
ひとときは飛魚の海日のをどる  
飛魚の指すも島影いまだなく



## 秀華採集

沖おぼろ手旗信号ならひをり

村田 富美子

いざという時身一つあれば連絡が可能なのが「手旗信号」、今は間に合わないが「沖おぼろ」と言う連絡不能時になかなかふさわしいものを考えていると言える。

胎内へ戻りしころ大桜

荒尾 茂子

辻神のあすへ初花あかりかな

井尻 妙子

「大桜」のゆさゆさとした揺れと「胎内」がたいへん合い、「あす」と「初花あかり」と取り合わせ、ともによいものを組み合わせたところを評価したい。

# 近 詠

## みちのく吟旅（五句）

鈴鹿 仁

ときめきし序として生る五月富士  
青葉 闇 義 経 ゆ 糸 の 悔 一 つ  
ものふの三つの寝棺春逝かす  
山 蟻 の 私 語 を 信 じ て 義 経 堂  
みちのくの風もて春思こけし眉  
雀隠れ  
蜘蛛の子のいのち糸に繋がれり  
石榴咲く雀隠れに風の沙汰

# 神麓集



千年の半跏像 新関 一杜  
 炎屋にもやすらふ千年の半跏像  
 町の場末幻月かかげひそと住む  
 夏の闇等身大の人体図  
 夏の朝焼たて固きフランスパン  
 涼風はさつと精進料理の小皿

深草うちは 林 日圓

瑞光寺深草うちは贈らるる  
 元政の深草団扇孝の風  
 縦長の深草うちは考案し  
 焼き印は元政庵のうちはかな  
 江戸の世に深草うちは人気あり

春の空 北村 香朗

春の空に見事英知のドツキング  
 宇宙よりオバマに通話春の宵  
 林檎食ぶ国際宇宙ステーション  
 宇宙にも軌道のありて春臙  
 限りなき人智の果ての春の空

上野の杜 和田 照海  
 本籍は上野の杜や恋鳥  
 花雪洞弓形吊りに浅草寺  
 下より上りの速き船おぼろ  
 杉風の別墅や隅田川おぼろ  
 草庵へ訪ふものに葦の角

高木 智

若き日は知らざりし刻明易し  
 新緑や歩行稽古の胸に来る  
 のどかなり齋王代の禊の儀  
 はるか来て一氣に去りぬ競馬  
 せうぶ湯を菖蒲と共に出でにけり

藤岡 紫水

遠ざかる口笛の唄夕花菜  
 菜の花や大和三山日照雨なか  
 言はれたらそんな気がする臙かな  
 等身の鏡に入る妓月おぼろ  
 寄居虫や眞昼の干瀉よく乾き

# 神麓集



ほほ笑み返し

北川

孝子

遠目にも靄立つゆらぎ春そこに  
振り返る齡の行方しべざくら  
人脈にあはくつながら春愁ひ  
中京の生家無人や霾ぐもり  
初蔵朝日にほほ笑み返しかな

船越

美喜

燦々と洛中洛外花に満つ  
ウインドウに先づ訪れし春の色  
補聴器に樽を拾ふ花の昼  
川沿ひに咲きなだれたる濃山吹  
それぞれの土に咲けよと菊根分

雪の峰

竹貫

示虹

鉄塔のまつ赤に塗られ猛暑なり  
耳と目の別々に覚め喜雨となる  
水を打つ何時帰つてもいいやうに  
夕顔の白々と妻帰り来し  
線香の煙の果の雲の峰

すみれ野

丹生をだまき

すみれ野に寝してふ万葉人羨し  
勤勞の黒き手で所作壬生狂言  
炮烙をぐわりと割るも壬生念仏  
頬に肩に触る藤房のしめりかな  
杉花粉朦々と舞ふ一吹きに

山田をがたま

仰臥せる窓いつばいに春の空  
退院の二文字は眼底日脚のぶ  
退院の予告知らさる雛の日  
ペランダより朝日受けたる花みごと  
リハビリへ往復の機花見どき

藤

柴田

朱美

藤垂れて非常扉を開けてをく  
若者は破調に生きて藤さはぐ  
藤揺れて乳房ひとつ掏られけり  
格子戸に藤が貼りつく旧街道  
したたかな藤に小軀を呑みこまる



# 京鹿子集

## 豊田都峰選

京都 村田富美子

沖おぼろ手旗信号ならひをり  
幹八方添へ木八方さくら咲く  
不器用なこたへ山吹ほつほつと  
満天星の鈴を鳴らせば秘仏開く  
母子草満ち足らざりし昼の月  
胸騒ぎ始まる花のつばみかな  
胎内へ戻りしころ大桜  
樟若葉花よりかるく輝きて  
片栗の咲くてふ山を遠望に  
畑打ちて眠りの息もあらあらし

荒尾 荒尾 茂子

京都 井尻 妙子

辻神のあすへ初花あかりかな  
三人の三様芽木の丘晴れて  
芽木の雨わたくしごとは懐に  
わらび折る野辺の機嫌を計りつつ  
発光は本気のあかし螢鳥賊  
マイヒーロー遺影に叫ぶ子春の暮  
春深し最後まで友米紳士  
留守電の声の主亡き春彼岸  
花サボテン年5時間のためにだけ  
折紙の東西交流夏来る

アリソナ 伊吹 之博